

誠美だより

3

2015/MAR

誠美保育園



園庭の垣根のように

まん丸に膨らんだ園庭の梅の蕾が、弾けていくかのように次々に開いています。この春の訪れはいつしよに、子どもたちの充実した成長の時を運んでくれます。

毎年のこの時期、園内をうろついていると、ある事に気づきます。一つは、今まで少しよそよそしかった子どもたちが親しげに私に声を掛けてきてくれる姿。これは、少し距離のあるよくわからなかった私(他者)の存在を意識できるようになった証です。特に低年齢の子に多いこのように「そうかそうか」と成長を実感する瞬間です。

そしてもう一つが、私の姿を見かけては、いの一歩に駆け寄って来た子どもたちが、いつの間にもやあまり気にとめてくれなくなっている事です。それは育つにつれ、子ども同士で関わり、自分たちで遊びを広げていく事の方がずっと楽しくなっていくからです。少し寂しい気もしますが、「これでよし」とひとり感慨にふけるのであります。

ちょうどこの時期の2〜4歳を中心にした、私の中の新旧交替のこの儀式は、4月過ぎくらいまで続きます。どちらの姿も誰

かに教えられたのではなく、家族や担任たちなど身近な大人に大事にされ、丁寧に応じてもらう経験を重ねた結果、おのずと生まれた変化です。これは私の中では、子どもたちの成長と園生活の質を測るひとつのパロメーターになっています。

そして、この時期の子どもたちは、一年で一番躍動的です。園庭入口付近の一角では、サッカー遊びが盛んなのですが、力のついた子どもたちの蹴るボールの勢いで、ゴール側の垣根の板一枚が割れてしまいました。今まで、板が外れることはあっても、割れることはなかったのですが。

忙しさにかまけて放置していたその垣根の補修に、ついに意を決して取り掛かったのですが、その際、割れた原因が決まっています。ボールの勢いだけでないことがわかったのです。垣根の板は釘で留めてあるのですが、それが外れる度に私は、もつと丈夫にと「木ねじ」を使って頑丈に留め直していたのです。割れた板はまさに、その留め直した板でした。

釘の場合は、ボールが当たっても釘が緩む(板が浮く)ことで力を吸収していたのですが、そこを「木ねじ」で強く留めた事

で、力の逃げ場がなくて折れてしまったのです。だからといって折れない強い板を使うと、次はきつと、垣根全体を支える「支柱」が痛む事になるでしょう。

今月7日は、少し早めの卒園式です。期待に胸を膨らませ巣立っていく子どもたちを「がんばって」と送り出すのですが、本当は、全部を頑張り過ぎてはいけないのかもしれない。どこかを緩めておいたり、力を抜いたり、一息つけたりして、ひとところに負荷が集中しないよううまく分散させてやるのが、周りの大人の役目です。

「しなやかに」

それぞれの新生活へと飛び込んでいくみんなに、そんなエールを贈ります。子どもたちへ、そして大人たちへ。

園長 折井誠司

- 編集 誠美保育園
- 編集人 折井誠司
- 発行人 折井誠司
- 印刷所 誠美保育園

発行所 社会福祉法人 誠美福祉会

〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-12

電話 042-675-1551

ファックス 042-677-5643

E-mail selsh@hoikuen.jp

<http://hoikuen.jp>

懇談会にて

先日の懇談会では、来年度から始まる新制度のこと、それに伴う延長保育制度の再編のこと、園内の修繕工事の内容とスケジュールなどのご説明を致しました。それらに関しては、既に配布物等でもお知らせしておりますので、ご確認ください。

また、秋に実施しました利用者調査のアンケート結果の速報もお伝えしました。総合的に98%のご家庭から大変満足・満足とのご回答を頂きました。(詳細はまともり次第お伝えします。)自由記述欄にお書き頂いたご意見につきましても、今後の園運営に生かしてまいりたいと思います。

カレンダー

3月	3 (火)	誕生会 (ひな祭り)
	4 (水)	発育測定 (K)
	6 (金)	発育測定 (O12)
	7 (土)	卒園式
	※園庭で行います。お散歩がてら見にいらいっしやいませんか?	
	9 (月)	防災訓練
	10 (水)	お別れ会
	12 (木)	乳児健診

<http://hoikuen.jp/higenote/>

カレー屋を見かけた

Blog



ジャンパーの襟を立て、園庭を、プラプラとこれといった目的もなく徘徊していたら、カレー屋を見つけた。

この辺りはよく歩いているのだが、さて、こんなところに店があったかな。昨今の飲食業界は競争が熾烈で、店の入れ替わりも激しい。その上、建築技術進歩なのか、あつという間に建て変えられてしまうので、この店も私が気づかなかっただけなのかもしれない。それにしても、専門店というのは、これだけの様々な道具を揃えて調理するものなのか、そう感心して眺めていると、こちらに気づいた店主が、財布も持たない私に、どうぞと気前よく器を差し出してくれた。

なるほど、家庭の味との違いはこうやって生み出されていたのだな。寒さもピークを迎えようというこの時期、ルーの冷たさが一層際立っていた。またくるね、と声を掛け店を後にした。この味を求めめるお客が、ひとりふたりと列を作り始めたからだ。また寄ってみたいな、そう思わせる雰囲気のお店だった。

明日になっても、店じまいしていなければよいのだが。